

長谷寺

『元亨釈書』という書物に次のような記述がある。長谷寺は、比丘の道明と沙弥の徳道（徳道とは法道仙人のことである）の二人が力を合わせて創建した。この寺の本尊の仏像を彫った木材は、近江国高島郡三尾の山から流れてきた、落雷で倒れた木である。この木が行き着いた場所には厄災がもたらされた。少しづつ流されて大和国葛下郡神河（初瀬川）の岸に漂着した。道明はこの木で仏像を彫ることを望んだが、その資金がなかった。心を一途にして木に敬意をつくして祈願した。その時、正三位中務少輔藤原房前が、天皇に上奏して、大和国の租税として納められた稻三千束を頂戴し、これをもって十一面観音像を彫刻させた。像の高さは約七・八メートルである。雷が岩石を砕いたものを台座とした。台座は四方が約二・四メートルの大きさである。仏師の稽主勲・稽文会（ともに奈良時代の仏師）がこの仏像をつくった。

また、ある人の話として次のような説がある。この仏像を彫った木材は、むかし辛酉の年に起きた洪水で、近江国高島郡三尾崎から流れてきた橋の一部の木である。この木が行き着いた場所では火災や疫病が起こった。大和国葛下郡にいた出雲の大満という者が、この木のことを聞いて、霊験あらたかな資材に違いないと思い、十一面の像を彫刻したいとの願いを起こした。しかしながら、この木材は巨大で容易に動かすことはできない。試しに縄をつないで曳いてみたところ、薄い木の板のような軽さであった。人々は驚きいぶかりながらも、力を合わせて曳いて運んだところ、最終的に大和国城下郡の当麻郷に着いた。間もなく大満は死去した。木材がこの地に留まってむなしく八十数年が経過した時、またしても付近の村里に疫病が起こった。村民はこの木を曳いて長谷（初瀬）川の上流に捨てた。また三十年が経過した頃、沙弥の徳蓮という者がいて、養老四年（七二〇）この木を山頂へ移した。徳蓮は木を彫って仏像をつくることを望んだが、てだてがなかった。朝晩の区別なく木に向かい、悲しみ泣きつつこれを拝んだ。その時、藤原房前が、天皇の命令を奉じて、国に納められた租税を徳蓮に与えて彫刻の費用に充てさせた。神亀四年（七二七）に造立がなつた。行基を招いて落慶供養を営んだ。さて、仏像を彫刻した時、徳蓮がみた夢に、仙人が告げて言うには、「この山の北の峰の土の中に大きな岩石がある。平らに整っていて傷はない。土を掘って取り出し、これに像を立てなさい」。目が覚めた後、その地へ行つて土を掘つたところ、案の定大きな石があった。四方が約二・四メートルの大きさである。表面には足跡がかたどられていた。新たに彫った仏像の足と同じ形であった。夢で告げられた通りである。仏像をその上に安置した。

以上二つの説には少し異同がある。並記してはつきりしない点を伝えるとのことである。